

氏名	福 尾 奏 平
授与した学位 専攻分野の名称 学位授与番号 学位授与の日付 学位授与の要件	博 士 学 術 博甲第1727号 平成10年 3月25日 文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	An Analytical Study of Mark Twain's Critical Attitude of Mind in His Pseudo-Historical Novels (マーク・トウェインの擬歴史小説における批判精神の分析的研究)
論文審査委員	教授 古川 隆夫 教授 西前 孝 教授 貝原 洋二 教授 稲村 秀一 神戸女子大学大学院文学研究科教授 那須頼雅

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、アメリカ19世紀後半の作家マーク・トウェイン(1835-1910)の世紀末における作品、特に擬歴史小説とみなされる、『王子と乞食』(1882)、『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』(1889)、および『ジャンヌ・ダルクについての個人的回想』(1896)の3編について、彼の風刺的批判精神が考察される。

元来彼は歴史に関心が深く、更に独学によって広く正確な知識を持つに至った。そして中世社会が持つ矛盾・不合理に気付き、その是正をテーマとして小説を書いた。このような作品を考察する一つの方法として新しい文学理論、特にミハイル・バフチンと関連のあるロシア・フォルマリズムの考え方を適用した点に新味があると思う。即ち作品の中心人物が王侯貴族のように社会の頂点に立つ人々ではなく中流以下の一般庶民であることに着目した点を評価している。このように3作品を通して中世封建制下の諸悪を追求するトウェインの姿勢を明確にした。

序論では中世のイギリスやフランスにおける国王、貴族、教会の不正・横暴に対してトウェインが鋭く批判していることが指摘される。しかもその風刺的批判をユーモアによって表現している所に特色が認められる。また、その批判が「過去への逃避」に見せかけて、間接的に現代を攻撃するという方法である。この二つの時代にわたる時の考え方は、T・カーライルの『衣裳哲学』(1833-34)に見られる時間論・空間論の影響があることに言及される。

第1章は、エドワード王子と乞食トム・キャンティが、衣服を交換して社会的身分を完全に転換する物語『王子と乞食』が扱われる。衣服一枚故にこの転倒・復元が起こることで、社会的身分の空しさが明らかにされる。それに加えて、一見児童文学の形に見せて当時のアメリカ社会の封建性を批判する内容となっている。

第2章では、『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』を扱われる。6世紀のアーサー王宮廷において19世紀アメリカの技術者ハンク・モーガンの進める改革活動が検討される。専制的な王政を倒して民主的社会を建設するというモーガンの理

想は、彼と同時代のアメリカの政治的、社会的な矛盾や墮落を風刺していると考えられる。また、この作品末尾のモーガンとサンディとの結婚、愛児の誕生、そして愛し合う二人との別離を意味する臨終の幻覚状態は、現実と夢の融合と解釈されている。

第3章では、天才的少女ジャンヌ・ダルクの純粹かつ潔白で奮闘的な生涯を探究される。特に注目し得るのは、完全に男性の上に君臨する少女が描かれている点である。トウェインはジャンヌを神聖な乙女として崇めるような書き方をしている。元来、彼はフェミニスティックな感情を持ち、妻オリヴィアや娘をいたわる気持ちを持っていたが、ここではジャンヌを理想化して描いた点が強調される。

第4章では、トウェインが同時代の社会特に政界・実業界・宗教界の腐敗に対して、過去を通してではなく直接現実の問題として批判を加えている点を、彼の風刺小説『金びか時代』（1873）に言及しながら考察される。この作品によっても、彼が「過去への逃避」が実は「現実の革新」を目指していたことがはっきりする。時空を超えたユートピアを求めることは、ハックルベリー・フィンが文明の束縛を逃れて自由の地に憧れるのと同じ心境であることが論じられる。

第5章では、トウェインのユーモアの特性を調べ、ユーモア表現の技法が研究される。彼は南西部の伝統を受け継ぐがそれに飽き足らず、アメリカ文学において、いわゆる国民的ユーモアを発展させた。彼のユーモアを詳細に分析するために、ウォルター・ブレアの説明などを参考にし、また修辞学的分類法を用いられている。「誇張」「控え目表現」「隠喩」「直喩」「繰り返し」などによって、彼のユーモアの本質が具体的に明確にされている。トウェインは、ユーモアを武器として社会の不正・矛盾を痛烈に批判した。彼の告発は相手に対してあからさまで直接的なものではなく、ユーモアに包んで行なうので、風刺的效果となり一層強力なものになっている。

ともあれトウェインはあらゆる種類のユーモラスな表現を用いて、彼の信念である人道的な社会の実現を目指したことは間違いない。彼の文学を特徴づけるユーモアが、目的を達成するための有力な手段であったことは十分考えられる。彼が若い頃西部で身につけた荒削りなユーモアも、東部で生活する中にいわゆるヴィクトリアニズムの洗礼を受けて社会の上品な風潮に受け入れられるものとなった。作品を読んでも初期の人の意表を突くような表現も次第に影をひそめ、後年には穏やかで時に哀愁を含んだ調子を帯びてくることははっきりする。例えば『ジャンヌ・ダルク』ではその傾向が著しい。

結論部では、トウェインは過去・現在を問わず不正な社会を改革しようと志すが、その主張には矛盾した所があることも論じられる。リアリスティックな記述の中にロマンティックな面をのぞかせているし、中世と18、19世紀との時代錯誤も見られる。しかし、トウェイン文学が、不統一な思考を含みつつも彼独特のユーモアを駆使して、「過去への逃避」という技法を用い、自由の国アメリカの存続の重大さを読者に訴えようとした意義は大きい。平等思想と人間愛によって、国民作家としての絶大な人気を損なわずして、その崇高な文学的使命を全うしていると結論づけられている。

論文審査結果の要旨

審査委員会は、招聘教授を含む5名の審査委員で構成し、審査に当たった。序論、第1～5章、結論、書誌からなる英文214頁の本論文を詳細に審査した結果、審査委

員が共通して評価した点は以下の通りである。

(1) 著者福尾氏はこれまでの『ハックルベリー・フィン』等の既存の研究を踏まえた上で、マーク・トウェインのそれぞれ歴大な擬歴史小説3作を、彼の風刺的批判精神とユーモアの技法という大きな2つの観点から、総合的に一貫して論じている。このことは従来の研究では稀であり(特に国内では皆無であり)、かつこの3作を「擬歴史小説」としてとらえたことは高く評価されてよい。

(2) 次に、第1章から3章までの各作品における精緻な風刺的批判精神の分析は十分評価されてよい。『コネティカット・ヤンキー』では舞台が19世紀から一挙に6世紀にタイム・スリップするが、これはカーライルの時間超越論の影響を受けている、とする見解は他に例を見ない。これまで気付かれていないが、『王子と乞食』や『ジャンヌ・ダルク』も仔細に検討するとユーモラスな表現を多分に含んでいることを指摘している。そのことを具体的な実例によって示している点は本論文が最初である。

『ジャンヌ・ダルク』における法廷でのやり取りは、歴史的記録を越えてトウェインの批判精神とユーモアの技法が存分に発揮された、極めてユニークなトウェイン特有のフィクションになっている。この小説は教会の墮落を厳しく追求すると共に、他の2作と同様に貧しい民衆の生活を生々しく描いている。その間に示されたトウェインの強い人間愛に着目したことはこれまでにない論考である。

(3) そうした各論の分析に加えて第4章で擬歴史小説でない風刺小説『金ぴか時代』(1873)を導入したことは、作家が〈過去への逃避〉という見せかけでなしに〈現実の革新〉を確実に目指したことを論証した点で、本論文全体の批判精神という内容を論理的に整合性をもって構築する上で、極めて効果的な補強となっており、注目に値する。

(4) この作家の最大の特徴と言っても過言でないユーモアの技法が、様々な角度から系統的に分析・統合されていて、彼の風刺が痛烈であることに変わりはないにしても、ユーモアに包まれると明からさまでないために一層風刺的效果があるという論理的展開は多とすることができる。

(5) 結論部において、諸作品には矛盾があるけれども読者に違和感を与えないような書き方をしており、トウェインがユーモアを活用して一般大衆に喜ばれるような作品を書き続け、多くの読者を引き付けたと論じている点も共感できる。更に彼の主張する人道主義は人々の心を強く捕らえ、それ故彼は国民的作家としての不動の地位を得るに至ったとしているのは、納得が行く結論である。

また英文は手堅く説得力があり、全体を通して真摯な学究的態度で貫かれている。

上記のように多くの評価できる点があるが、幾つかの問題点も指摘された。

第1に、本論第5章の「ユーモア論」での本格的な取り組みへの意欲と試みは十分理解でき、様々な角度からの系統立てと分類も納得出来るけれども、それらのユーモア・風刺・アイロニー等が実感をもって読者に伝わってこない嫌いがある。このことはユーモア論が如何に理論化しにくいジャンルであるかを暗示するものであり、このテーマでM・トウェインを論じるためには十分理解出来る事例集が必要であろうし、このテーマのみで数百頁の論稿が必要となるであろう。要は第5章で納まり切れないテーマなので、それぞれ第1章から第3章までの論点を補強する形で、各章ごとに分配して論じた方がよいのではなかろうか。

次に、「擬」歴史小説というジャンルに関する福尾氏の理解の仕方は一つの卓見であ

るが、それに加えて最近の New-Historicism という観点からの分析方法も考慮に入れるべきではなかったか。

第3に、本論文が対象としている擬歴史小説に関する国内の研究動向がもっと明示されるべきであり、その研究が乏しいものならば、その理由を明記して、福尾氏の研究の立場とその重要性を明らかにすべきではないか。

最後に、確かに手堅い論文ではあるが、やゝ諸説に依存する傾向があり、そのために推論にメリハリが欠ける嫌いがなくもない。

以上、後段のデメリットを考慮に入れても、前段における顕著なメリットが十分認められるので、本論文は博士（学術）の学位が授与されるにふさわしいものと認められる。